

第 12 回 IEA-IEF-OPEC Symposium on Energy Outlooks に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

2 月 16 日、リヤドの International Energy Forum (IEF) の本部において、第 12 回 IEA-IEF-OPEC Symposium on Energy Outlooks が開催された。このシンポジウムは、2011 年の第 1 回以来、毎年リヤドで産消対話の一環として開催される国際会議である。今回の会議には、表題の世界の 3 大エネルギー国際機関の代表を始め、主要国の政府関係者、エネルギー産業関係者、そして専門家が集まり、短期・中期・長期の世界のエネルギー見通しについて、活発な議論が行われた。このシンポジウムの本来の目的は、国際エネルギー市場の安定のため、消費国を代表する IEA と産油国を代表する OPEC が、産消対話のための機関 IEF の仲立ちで、率直に意見交換と対話を実施することである。

筆者がこの会議に参加するのは、2020 年 2 月の第 10 回シンポジウム以来、2 年ぶりであった。前回会議はコロナ禍が本格化する直前の開催で、翌 3 月以降、筆者も国際会議参加のための海外出張は途絶えていた。今回はリアルの国際会議参加のため 2 年ぶりの海外出張でサウジアラビアを訪問し、参加者と顔を合わせて意見交換することが出来たことは極めて感慨深いものがあった。この 2 年間で、コロナ禍の甚大なインパクトでエネルギー市場が激震し、次いでカーボンニュートラルの大波が世界を揺さぶり、次にエネルギー価格が同時多発的に高騰、最近ではウクライナ情勢の緊迫でエネルギー地政学が世界の関心の的となるなど、極めて大きな変化が国際エネルギー市場に相次いで発生してきた。今回の会議では、それらの変化と現状での重要課題を意識した議論・意見交換が行われた点が重要である。以下では、筆者にとって特に印象に残ったポイントを所感として整理してみたい。

第 1 には、議論の中心的な話題として、エネルギーセキュリティの問題が大きく取り上げられてことを挙げたい。もちろん、コロナ禍による国際エネルギー市場への影響やカーボンニュートラル実現に向けた取組みの重要性なども重要な問題関心として、多くのスピーチやディスカッションの中で取り上げられたことは言うまでもない。しかし、シンポジウム参加者の多くにとって、昨年後半から国際エネルギー市場を揺さぶり続けているエネルギー価格の同時多発的な高騰と、それによる世界及び各国経済そして市民生活への悪影響という問題が喫緊の重要課題となっている。

また、このエネルギー価格高騰をもたらした様々な要因に注目すると、需給バランスのひっ迫という基本的要因に加え、脱炭素化に向かう過程での必要投資の不足による構造的需給ひっ迫の可能性や、足下で展開するウクライナ情勢の緊張に象徴されるエネルギー地政学の影響増大など、エネルギーセキュリティの重要性を強く意識せざるを得なくなる状況が眼前に展開しているのである。

2020 年以降、昨年までは様々な国際会議にオンライン参加して世界のエネルギー政策・産業関係者や専門家と意見交換すると、この期間の前半はコロナ禍の影響分析、後半はカーボンニュートラルに向けた展望と課題に焦点を絞った議論が続いてきたように思われる。しかし、国際エネルギー市場の潮目が変わる中、今回のシンポジウムでは、主要なスピーカーやモデレーターなどから、相次いでエネルギーセキュリティの重要性を強く指摘し、エネルギー市場安定に向けた取組みの重要性を強調する発言・議論があった。

この重要な変化が筆者にとって特に印象に残った第 1 のポイントである。それだけ、現在に至るエネルギー価格の高騰とその原因となっているエネルギー地政学要因を始めとする複雑な市場状況が先行きの不透明感を高め、重要かつ深刻な問題として浮上していることを反映している。

もちろん、こうした状況下でも、カーボンニュートラル実現に向けた取組みを疎かにしてはならないのは当然である。長期的な地球規模の重要課題として、世界の主要国がいずれも公表しているカーボンニュートラル目標の実現に向けた取組みを進めていくことは引き続き極めて重要な課題であり、今回のシンポジウムでの議論でもその基本には変わりなかった。しかし同時に、足下でのエネルギー市場の不安定化とエネルギー価格高騰の影響を受けて、カーボンニュートラルへの移行を、如何にスムーズに、安定的に、コスト・負担を抑制しながら実現していくかが極めて重要、という問題意識が強く示されたように思われる。この点も、今回のシンポジウムにおける議論の特徴として印象に残った点である。

エネルギーセキュリティ問題への高い関心がこのシンポジウムの特徴となる中、エネルギーセキュリティ問題そのものが多様で複雑さを増していることが議論の中で示されたことも興味深かった。現在のエネルギーセキュリティ問題に関する喫緊の最重要課題はウクライナ情勢の緊迫化とそれに伴う潜在的なエネルギー供給支障の発生という、どちらかと言えば古典的エネルギーセキュリティ上の問題である。エネルギー供給者としてのロシアの重要性とそのロシアへの高い依存度の問題、そして地政学リスクが供給支障につながる場合の重大な帰結に関する懸念が現在のエネルギーセキュリティ問題の最大関心事である。

この古典的な問題に加えて、脱炭素化に向かう世界における投資不足と構造的な需給ひっ迫の可能性、ブルー水素・アンモニアの国際供給チェーンが発達した場合のこの新たなクリーン燃料の国際貿易を巡る安定供給の課題、脱炭素化の鍵を握る電力化進展に付随して一層重要性を増す電力供給セキュリティの課題とそれに対する新たなリスク要因の存在、再エネ及び電化推進の成否を左右する稀少鉱物の安定供給を巡る課題など、新しいエネルギーセキュリティ上の課題が重要性を増している。今回のシンポジウムでは、こうした状況も踏まえ、エネルギーセキュリティに焦点を当てた議論が行われたといえよう。

もう一つ、別のポイントとして、このシンポジウムにおける議論の重要な特徴と感じたのは、原子力への関心が大きく示された点である。複数のスピーカーが原子力の将来と可能性、果たしうる役割について報告を行い、多くの参加者が原子力の役割について発言を行った。これは、脱炭素化を進めていく取組みにおいて、安定的なベースロード電源として、電力安定供給に貢献するエネルギー源としての原子力に新たな脚光が当たっていることを示唆している。まさに、エネルギーセキュリティが重視される世界において、重要なオプションの一つとして原子力が「Revisit」されている、という印象を受けた。EU タクソノミーにおける原子力の位置づけ、フランスにおける新規原子力建設計画の発表、世界的に取り組みが進められる小型モジュール炉（SMR）などの新たな、かつ重要な動きが指摘・言及されたこのシンポジウムの議論は、世界のエネルギー問題の将来を議論する中で過去 10 年ほどの期間においては見られなかった新たな動きである、との印象を強く持った。

冒頭に述べた通り、2 年ぶりのリアルの国際会議での意見交換に参加して、やはりオンラインには無い密度の濃い議論の重要性、価値を改めて実感することができた。世界の重要なエネルギー問題を議論し、解決策を模索していく上で、こうした意見交換とネットワーキングは今後も必要不可欠であり続けるだろうとの印象を持ったことをまとめとしたい。

以上